『陣中日誌』の特異な歴史的性格

三上一夫

序

―戦争の悲惨さ、家族のきずなを後世に―と、福井県鯖江市三十六町の山田桂茂氏が、日中戦争に出征した父親、山田茂左エ門の『陣中日誌』（原本名『戦陣日記』）を中心として一冊の著作を二〇〇八年（平成二〇）六月、公刊した。

同日誌は、八年前自宅を建て替えるときに、たまたま倉の中で見つかったもので、故茂左エ門が、日中戦争の召集令状により、第一線先頭部隊の指揮官たる小隊長として、中国北部〈華北〉へ出征した一九三九年（昭和一四）三月十六日から除隊した翌四〇年一月二四日までのほぼ連日を記録したもので、縦一五㌢・横二〇㌢のノート約一〇〇ページ分である。

桂茂氏は、「戦時の真実を知る極めて貴重な資料」と考えたが、このさい親子三代の軌跡を残そうと、父親の別の手記、丹生郡会議員を務めた祖父が内務大臣原敬（のちの首相）に対する陳情記、桂茂氏の種々追憶記や親族の手記・家系図など〈A四判一四一ページ〉にまとめて『山田家三代』を発刊した。

ところで故山田茂左エ門〔一九九六年（平成八）七月二六日没、九〇歳〕は、筆者（三上）の亡母、三上チイ〔一九七六年（昭和五一）一一月九日没、七三歳〕の実家の当主でもあった。

なにぶん、こうした『陣中日誌』は、従軍将兵の真情を隠さずに吐露し、真実の戦争観が見出せる点で、きわめて注目をひくところである。本稿では、日誌の特異な歴史的性格に精いっぱい照明を当てたいと思う。

三上の華北での軍務時代

実は三上が『福井県史』〔一九七八年（昭和五三）～一九九四年（平成六）および『福井市史』〔一九九三（平成五）～二〇〇四年（平成十六）〕の明治以降の近現代史分野編さん事業を終始担当し、資料収集にも当ったが、戦地からの軍事郵便（手紙・ハガキ）の類は散見されるが、『陣中日誌』としてのまとまった資料は、残念ながら見出せなかった。

三上は、一九四三年（昭和一八）十二月一日、現役兵として朝鮮平壌（現、北朝鮮のピョンヤン）の歩兵七十七連隊に入営、初年兵の厳しい軍隊教育をうけた。そして翌十九年四月より中国北方（華北）、北京南方の石門（現、石家荘・シーチャチョワン）の予備士官学校（北支派遣第一八七〇部隊）に派遣され、同年十二月末まで士官候補のための激しい軍事教育をうけた。部隊周辺の治安は芳しくなく、八路軍の暗躍が目立ったため、教育をうけながら、直ちに戦闘態勢に移行する訓練も実施された。

従って山田茂左エ門の『陣中日誌』内の記載にかかわる地域性に対して、三上としては肌で体験したため、日誌についてはいたく深い関心が寄せられるわけである。

『日誌』にみる本心吐露の具体例

まず華北の**風土性**にかかわる記述が注目をひく。「天気晴朗なれども、風激しく黄塵飛散す」（四月二二日）・「風激しく黄塵空を蔽ひ通視困難なり」（五月九日）の記載につき、三上の体験では、四～五月にかけては毎日のように黄塵に悩まされ、たえず防塵眼鏡をつけねばならないほどであった。

一方、「腹の病む事甚だし」（四月一一日）・「体具合・腹具合・歯の具合悪し」（四月三〇日）・「腹具合悪く」（五月二日）」・「腹具合未だ直らず」（五月三日）・「腹具合悪し」（五月六日）など、四～五月に腹具合不調の記述が目立つが、この点、生水の飲用によるものとみられる。三上が華北に在勤した時分にしても、生水の飲用はてきめん腹具合を悪くしたことが想い出される。なにぶん第一線の戦闘部隊では、とかく生水を飲まざるを得なかったことが察知される。

まず**故郷や家族のこと**が気にかかる点で、「内地のことも家のことも打ち忘れということがあるが、僕は一向に今の所忘れない。矢張り心にマザマザと浮かびて日を送る」（三月二九日）・「夢に家に帰りたる所、生れたるは男子なりき。又小生負傷して病院船にて内地還送なり居りたるを発見す夢の面白さ」（四月二〇日）・「暇さえあれば思い内地に馳せる」（四月二三日）などの記述が目立ち、はげしいホーム・シックにとりつかれ、夢にまで帰還のことが現われるような始末である。

つぎに「**神仏の加護**」にかかわる記述で、「本戦闘に於いては木谷中尉戦死せられ実に気の毒の極みなり。生死の界をときに往復せるも、神仏の加護によりて命を長らへ実に幸いと云うべきなり」（四月一三日）、また「弾丸飛来するも此れを警戒する気持ちあれど、体の自由利かず、運を天に任せて悠々突撃す。吾が作戦の妙にて敵脆くも敗退するが、吾が運命の強さかな、命がけの仕事はつらいものだ。併せ神仏の加護をよろこぶ」（五月六日）が注目をひく。

中国良民の戦禍については、「殆んど全部の家屋又は家具は極度に損傷せらる。収拾す可らざる惨状を呈し大家の主婦帰来し号泣し食ふに食なく又鍋釜に至る迄なし。途方に暮れたる様全く良民の戦禍を蒙りたる」（四月二一日）の記載や「途中、敵が抵抗するもの無く午後零時半、目的地到着す。村人の大部分は避難し一部残存するものは可哀想に三拝九拝し救命を乞う。庭を追う兵士の声。鶏の悲鳴敗残国の憐れさをつくづく感ぜらる」（四月五日）などは「戦禍による中国良民の苦しみ」がはっきり認められる。

さらに「**モラルの課題**」にかかわるものとして、北京駐在中、「友人六人と酔狂に日本酒場と支那料理屋を廻る。男女混浴の支那風呂は又格別に濃厚味あり思い出の種としておかしくもあり、又父母銃後に対して罪ならんも、是又、野戦生活第一歩の味として、又幹部としての或種の体験の必要ならんとも思ひ自ら慰む」（三月二三日）と本人自身のモラルにもとる体験を記述する。

また兵士のモラルに逆らう言動につき、「兵の精神教育上如何かと存じ敢えて中隊長に進言す」（五月二五日）と、次の七ヶ条の条文を揚げる。「①戦場に於て支那人部落を荒し珍品の略奪をなす。②部落の女を狩集め陰部を点検して喜ぶ。抜刀して恐喝する由。

③将校に対して敬礼をなさず（欠礼）。④兵の身上に対して中隊長に不連絡にて独断越権行動に出、又側近の者を偏愛する由。⑤功績上申の書類等に於て中隊長に秘して私的書類を差し出し又は中隊控えと異なるものを伝達す。⑥行季中には沢山の宣撫品充満し風紀上有害なるものあると聞く。⑦兵所有の私物品等を強奪す。」の記述は、明らかに正常な道義上のモラルに反する点を指摘するわけである。

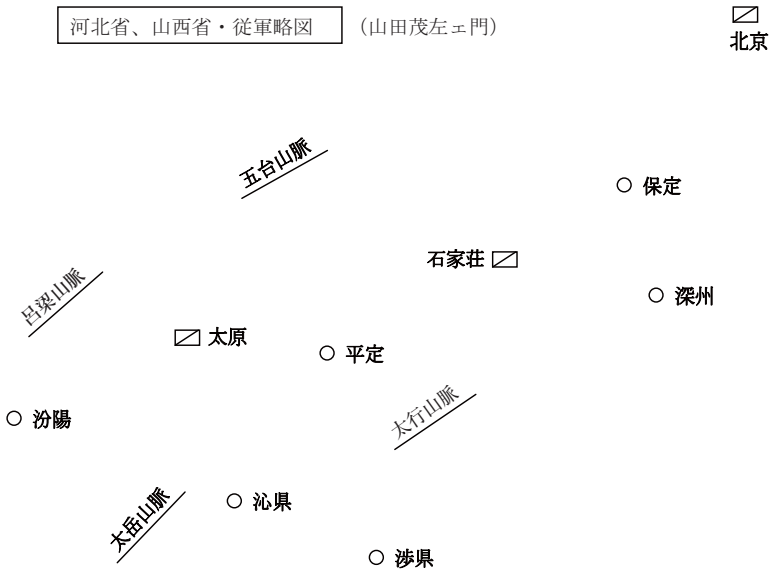
ところで、日夜の戦闘生活のなかからの「**自己反省**」・「**自己批判**」にかかわる点をひれきしたい。

まず、〈**強大な国軍**〉の背景でこそ、華北戦線での有利な展開がみられると判断する。このさいわが国の幕末維新期にさかのぼって「明治の初年に攘夷論を論じた人々は、本当に偉いと思ふ。あの大の黒船の襲来をまのあたり見ながら兎にも角にも之を武力で以ってやっつけようという様な心根があったればこそ、現在の日本が世界脅威の中心となって其の檜舞台に躍進できたのではないだろうか。」（七月三一日）と強大な国軍の歴史性を重視するのである。

また、「物事は自信付くまで考えて、男の意気で通し貫け」との命題をかかげ、「熟々考へると、自分は両親の庇護の許に永く暮らしたせいか、自我発展意識「男の我」が、どうやら他人よりは少ないように思い知る。意気地なしのように本当は思われてならない。あるのは「空元気」だ。」（七月二五日）と〈**自我意識の欠落**〉に対して、厳しい自己反省を述べるわけである。

次に率直な〈**祖国愛**〉にかかわる「自己批判」として、「嗚呼日本の此の大陸進

河北省、山西省・従軍略図　（山田茂左ェ門）



＜眼部戦傷入院後のあしどり＞

昭 14 年 8 月／3 日　大谷野戦病院―8／16　太原陸軍病院―8／21　石家荘 1 泊 8／22　北京病院―11／27　病院船三笠丸に乗船―12／1　大阪日本赤十字病院―1／8　鯖江着－1／18　召集解除命令―1／19　除隊

出振りを見て何と素晴らしい大決断だろう。」とし、「其処に日本人として骨の折れる点があるのだ。併し此の所を押し切る力を日本が出すか出さないかによって事真（自信）にもなり偽にもなる。障害をも突破し行く大勇猛心が必要となるのだ。千万人と雖も吾行かんと云ふ燃える闘志を貫徹する所に真の神ながらの日本精神が宿り、向ふ所皆敵なしの偉大なる力がわくのだ。」（七月三一日）が何よりも雄弁に物語っている。

また、〈**健康**〉について、「身体の強健という事が事を成し遂げる大いなる力になることを知った、今度、北支派遣を命じられて悲壮の決心を以って出てきたが、終始体の具合が悪い様に思われて芳しくないのだ。（中略）其の苦労が実に並大抵で無かったと思ふ。日本小国民の体を養うと云う事が又見逃せない大切な事と思ふ。一日早朝」（八月一日）の記述は、明らかに眼部戦傷による入院治療を余儀なくされるわけである。（八月一六日、太原陸軍病院に後送）この点、一般の日常生活でもまず第一に「健康」の重要さが指摘されるが、戦場では尚更であることが改めて痛感される。

中村常賢著作『陣中日誌』

三上が刊行物として見出した『陣中日誌』〔二〇〇七年（平成一九）三月、刀水書房刊〕について述べることにする。同日誌は、中村常賢（つねかた）〔一九〇九年（明治四二）～一九九五年（平成七）八六歳没〕の著作によるものである。昭和一三年（一月一日）から翌一四年（四月二五日）に及ぶが、時期的に前述の山田茂左エ門の分と重なるところを取り上げることにする。

中村は陸軍下士官で、十名前後の最先端部隊の分隊長として軍務にかかわるが、まず**故郷や家族のこと**が気にかかる点として、「妻よりの手紙がくる。一番しりたい事はやはり妻子の動静だ。無事としってほっとする」（一四年一月五日）や「併し今日我々の神経はただ〳〵帰還といふ一点に集中している。それだけは争ふ事の出来ない事実である」（一月一七日）と記述するが、「一月以来内地及妻の手許に手紙を郵送したが、今回の作戦（註、南昌攻略戦）は極秘なので書くことが出来なかった、妻は今頃予が戦地の何処に銃剣を取ってゐるのかを恐らくしるまい。夫の行動・安否をしらない妻は淋しい気分になってゐる事と思ふ」（三月一九日）の記述には、中村自身が故郷や妻子のことがわからない不遇さを率直にひれきするものといわねばならない。

なお同日誌には、「新作戦記録」の名義（元本『雑記帳』）で、中支切っての巨大都市南昌（ナンチャン）攻略作戦を中心とする昭和一三年六月より翌一四年四月までの記載がみられる。四月四日には日本軍が南昌を占領し、甚だし烈を極めた南昌攻略戦は完了することになる。

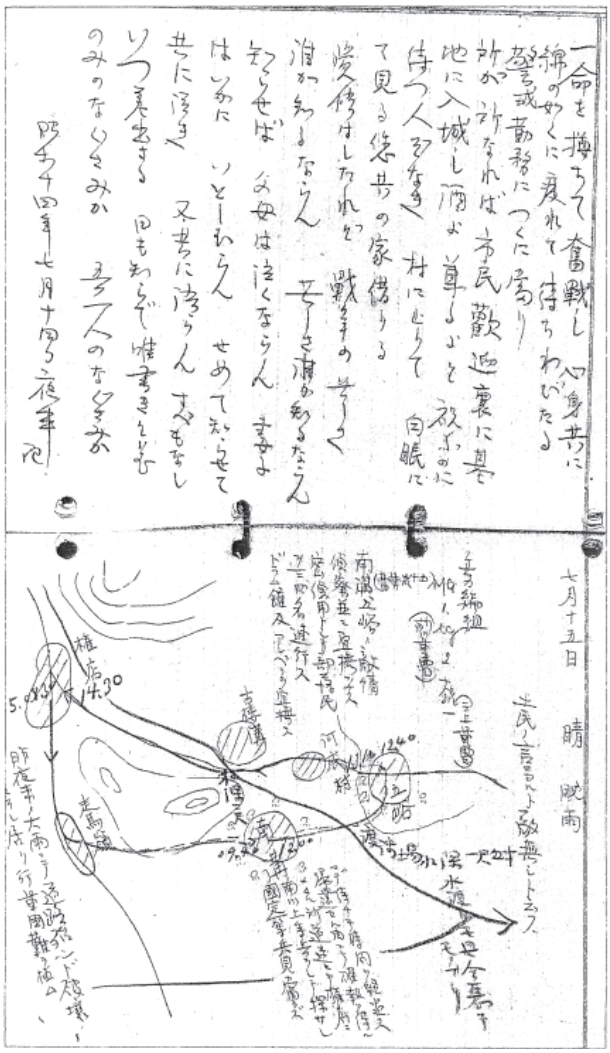
ところで**中国部落民の対応**につき、「途中山中の諸部落では爆竹を挙げて歓迎する、余りにも手の裏をかへしたやうな歓迎振り此に支那人の事大主義の現はれを見る事が出来る、併し一面淋しい気がする」（三月二四日）と、中国部落民の歓迎ぶりに対して、冷ややかな目を向けるのである。

さらに「**モラルの課題**」にかかわるものとして、「塗村（高郵市東方約四粁）といふ所

には約千名近くの避難民居り、物資も相当豊富との事、加之相当数の姑娘（クーニャン）あり、目の保養をしたと、中には凌辱を加へたものもあったと、戦争の事ではあり、長い期間婦女に接しないため性慾的になってゐるものも多々ある事であり、やればやり得といふ考へであらう、この問題については色々と考へさせられる。」（四月一一日）と卒直な見解を述べるのが注目をひく。

ところで、実家などとの文通は禁ぜられ、その点ほとんど記述されないが、戦場での生活や戦闘のはげしさは、しばしば記載される。一例をあげると、「やがて（一四年）三月二十三日早朝となる、（中略）不図気が附くと池中に土左ェ門あり、恐らく一刀くれて投げたらしい。普通なら到底死体と相対して食事は出来ないが、既に行動開始以来四日重い装具を附け、夜といへども不眠不休急追撃、今は疲労を通り越して自分の身体か他人のか分からない位である」との記述や、「我部隊の将兵一同は南昌へ〳〵夢中の行軍を続けて居る、X日は正に二日後の事である、生死を超越した没我の境地に入るのである、人間として誰しも生を惜しまぬものはない。併しそれも警備といふやうな閑暇な時の事で、一度戦斗となれば誰もが生を忘れてしまふ、言ひ様に依っては自暴的な気分になるのである」（三月一八日）の記載など、戦斗のし烈さを物語るのである。

同日誌の「あとがき」で、「父が亡くなって十年後、二階の使われていない部屋の片隅に埃のかぶった市販の日記帳が十冊ほど置き去りにされているのを発見しました。昭和六年から綴り始めた父の日記でした。その中でも特に薄汚れていて、薄っぺらのA5版のノート二冊がここに活字化した『陣中日誌』と『雑記帳』（本誌では「新作戦記録」）で



〈山田茂左エ門『日誌』より〉

す。一兵士として応召した父は毎日の体験を綴るため戦地でいつも持ち歩いていたようです」（一二五ページ）と、編者の中村常賢次女、相原奈津江氏が述べている。

さらに「私の知っている父は、日記帳に書かれていた父とは違い、自分の心情や過去をほとんど語らず、寡黙で穏和で寛大な人でした。特に晩年は何かを悟ったかのように、感情を顔に表すことはありませんでした。もちろん戦争についてはほとんど語らず、私も積極的に聞いたことはありませんでした。しかし、父が中国に出征していたことは、母から聞いて知っていました。」と述べるところは、前述の山田茂左ェ門の場合と同じく、あくまで、自分自身の戦場生活での思想や意見を卒直に述べたもので、将来他に見せるために記述したとは、到底考えられないわけである。

総　括

序でながら述べるが、かって本土最南端の知覧特攻基地で、特攻兵の日常生活の世話をした知覧高等女学校生〈なでしこ隊〉のリーダー役、永崎笙子氏（当時一五歳）のいわゆる「特攻日記」が、はからずも残存し、昭和二〇年三月から四月にかけての二三日間で、計一〇九名の特攻兵の出撃を見送った記述から、特攻兵のなかに出撃の前夜に涙を流して号泣したことが判り、かれらの偽らざる本心がみてとられる。

要はこうした日記・日誌類は、拙稿での『陣中日誌』とも同じような歴史的性格が見出される。つまり拙稿で「本心吐露」の具体例で指摘したとおり、「暇さえあれば思い内地に馳せる」始末で、夢にまで帰還のことが現れる有様で、また「神仏の加護」により「命を長らへ」るとの思考、従軍兵のモラルに逆らう言動、戦闘生活のなかからの「自己批判」・「自己反省」などは、あくまで自分自身の本心（本音）をはばからずに述べたもので、決して他に見せるためのものではない。

その点、従軍兵の思考の一般の建前論とは異なる本心が如実に判明するだけに、きわめて珍重な文献といわねばならない。